

# 水を無視してあなたの病気は治らない

1993年 KKロングセラーズ

林 秀光 (はやしひでみつ)

神戸大学医学部卒、医学博士、「水の会」主幹、

医療法人誠仁会協和病院顧問、全国日本学士会会員、

1991年「第14回ニューヨーク国際発明EXPO」にて金賞受賞、

1991年全国日本学士会「アカデミア学術賞」受賞。

## 過去8年間の臨床症状改善効果

過去8年間にわたり、協和病院(神戸)の河村宗典医師とともに「還元水」ならびに「酸化水」の臨床症状改善効果について観察を続けてまいりました。

その結果得られた臨床改善例を以下に箇条書に記してみます。

1. 糖尿病患者の血糖値の早期下降
2. 糖尿病性足部壊疽症例における末梢循環早期改善
3. 胃潰瘍、12指腸潰瘍の改善と再発予防
4. 痛風患者の尿酸値の早期下降
5. 肝疾患症例における肝機能の早期改善
6. 高血圧、低血圧、冷え性の改善
7. アトピー性皮膚炎、ぜん息、じんま疹、鼻炎などのアレルギー疾患の改善、治癒
8. 高コレステロール血症の改善
9. 月経困難症、更年期障害、生理不順の改善
10. 新生児の血清ビリルビン値の改善
11. 不定愁訴、自律神経失調症の改善、治癒
12. 神経性下痢、胃切除術後の持続性下痢の改善、治癒
13. 関節リウマチの改善、治癒
14. ベーチェット病の改善、治癒
15. 川崎病の改善、治癒

などとなっております。

上に述べた改善例には全例において共通に見られる事実があります。

それは、いずれも頑固な便秘、長年にわたる「悪臭便」が「きれいな便」に一変した後、症状の改善がみられたということでありませう。

どのような病気であれ、早期発見・早期治療が大原則です。  
 病気の発見が早ければ早いほど経過も良好となります。  
 さらに理想をいえば、初めから病気にならないにこしたことはありません。  
 病気予防こそが人類の理想です。  
 私は、少なくとも私一人だけは、病気予防は可能であると断言いたします。  
 しかも、その手段は極めて簡単だと断言いたします。  
 その鍵は、生物の生存を支える二本足にあると考えます。  
 左足は「酸素」です。  
 右足は「水」です。  
 どちらかが欠けただけで、あなたも私も確実に死を迎えます。  
 酸素と水こそは、生物を支える両輪です。  
 したがって、生物の生存を脅かすものを推測するとすれば、まず何をさておき、この  
 両輪の異常を疑ってかかるべきです。  
 左足の酸素の代謝の結果できる「活性酸素」を右足の「水」が解決する。  
 ちょうど、左足を痛めたあなたが、右足でケンケンして体のバランスを取るように。

### 活性酸素が細胞を酸化して病気に追い込む

生物は二本足で生きている。右足は水であり、左足は酸素であると申し上げました。  
 したがって、いまあなたが何らかの疾患に罹っているとすればその原因として考えな  
 ければならないのは右足の異常であるか左足の異常、あるいは両足の異常であろうと  
 いうことです。このとき左足の異常に相当するのが酸素利用代謝の不始末、すなわち  
 「活性酸素」であります。  
 「活性酸素」は酸素毒とも称され、私たち生物が生命を維持するのに不可欠な「酸素利  
 用代謝」の一種の副産物として生じてくる物質であります。  
 私たちが生きていくのに酸素は欠くことができません。しかし、酸素は空気中では比  
 較的安定していますが、体のなかに入りますと代謝の過程で活発な酸素、そばにある  
 物質とくっつく力の強い酸素、言い換えればたいへん酸化力の強い酸素に変わります。  
 これを「活性酸素」とよんでいます。  
 私たちは酸素なしでは数分後に死んでしまいます。酸素呼吸は不可欠ですが、酸素呼  
 吸をするたびに取り入れた酸素の2%が活性酸素になります。  
 このように、活性酸素の発生は私たちにとっての一種の宿命とでもいうべきもので  
 す。  
 活性酸素のくっつく力がなぜ強いのかとといいますと、活性酸素は原子核の回りをま  
 わっている電子が対をなしていない“不対電子”になっているからなのです。  
 原子核の回りをまわっている電子は普通、彼と彼女のように対(ペア)を組んでいるた  
 め安定しているのですが、どちらか一方が抜けて彼あるいは彼女だけになるとそれぞ  
 れが情緒不安定になり相手を求めて見さかいなしにそばにいる異性とくっつきこうと  
 するように、不対電子をもった酸素もそばにある物質にやたらとくっつき、それを酸化  
 しようとします。  
 不対電子をもった物質を総称して“フリーラジカル”とよびますが、フリーラジカルと  
 しての活性酸素はたいへん酸化力が強いのです。  
 この酸化力の強くなった活性酸素が、いろいろな細胞を酸化する結果それぞれの臓器  
 を病気に追い込むというわけであります。

## 活性酸素発生要因の90%は胃腸内異常発酵

活性酸素の発生原因として考えられるのは、

- (1) 酸素呼吸の結果  
私たちが酸素呼吸をする時、取り入れられた酸素の2%が活性酸素になるといわれています。これはいうなれば、動物としての宿命であるといえます。
- (2) ストレスのかかった時
- (3) タバコを吸った時
- (4) アルコールを飲んだ時
- (5) 紫外線、放射線を浴びた時
- (6) 激しいスポーツをした時
- (7) 排煙・排気ガスを吸った時
- (8) 細菌・ウイルスの侵入を受けた時
- (9) 抗ガン剤の投与を受けた時
- (10) 血管の中を流れていた血液の流れがいったん途絶えたあと再び流れ出した時  
(これを「虚血・再還流障害」とよびます)

以上のように要約できるかと思います。

上のような見解に対して、少々極論に過ぎるかと思われるかもしれませんが、私自身は次のように考えています。

それは、右に述べた10項目の要因をすべてひっくるめても人体の中での「活性酸素」発生要因のせいぜい10%以下であろうというものであります。

では、残りの90%は何かといいますと、それは「胃腸内異常発酵」であるというのが私の考えであります。

## 胃腸内異常発酵による悪臭便は猛毒

すなわち、あなたが胃腸内異常発酵による「悪臭便」を排泄している時が、「活性酸素」が大量に発生する最大の要因であるというものであります。

その根拠を述べてみたいと思います。

悪臭便の中に含まれる腐敗性代謝産物の硫化水素、アンモニア、ヒスタミン、インドール、フェノール、スカトール、ニトロソアミンなどはあなたの生命を脅かす毒物ですから、それらの害からあなたを護るために生体防御機構は直ちに発動することになります。その際、あなたの体を守る免疫機構の主役である白血球(なかでも好中球)は活性酸素を放出し、その力でそれら腐敗性代謝産物を攻撃除去しようと図ります。

その結果、どうしても「活性酸素」をつくり過ぎてしまうことになります。

年中飽きもせず「悪臭便」を落としている人は、体の中で慢性的に「活性酸素」をつくり続けていることになります。あなたの体の中には、前述したように活性酸素を消す働きをする物質もあるのですが、その働きにも限度があります。

10年、20年経つうち、あなたの体の中で活性酸素にいためつけられた細胞が増え続け、やがて肝臓や膵臓あるいは腎臓といった臓器が壊され機能が低下し病気になるのです。最悪の場合、あなたはガンにおかされることになるというわけでありませぬ。

活性酸素発生要因の9割を占める「胃腸内異常発酵」を忘れて、他の1割のうちの喫煙・飲食・ストレスを大騒ぎしているのが現代医学であるというのが私の結論であります。過去8年間にわたる臨床症状改善例の観察で明らかになったことは、症状の改善が見られる前に、すべての症例において「悪臭便」が「きれいな便」に変わったという事実であります。言い換えれば「排泄便の変化」が見られないうちは臨床所見の改善も見られないということになります。

この事実は、「胃腸内異常発酵」の改善が見られない間は臨床症状も改善しないということの意味しています。このことから「胃腸内異常発酵」という現象が「万病の元凶」といわれる『活性酸素』過剰産生の最大の要因となっていると結論させるをえないのです。

要約しますと、

- (1) 還元水の飲用によって「胃腸内異常発酵」が改善された。
- (2) 「胃腸内異常発酵」の改善によって「活性酸素」の産生が正常化された。
- (3) 「活性酸素」産生の正常化が臨床症状の改善をもたらした。

ということになります。

このように考えていきますと、さまざまな病気で苦しんでいる人たちの「排泄便の性状」にほとんど関心を払おうとしない現代医学が、それぞれの病気の治療に非力なのも当然といえば当然であるということになります。

私の表現を使えば、「川上の水」の汚染を放置したまま「川下の水」に点滴注射しているのが現代医学である、ということになります。

## 排泄便をきれいにする電解還元水

どのような病気であろうと、あなたが現在病気に追い込まれるに至ったのは「胃腸内異常発酵」をこれまで長年放置してきた結果だというのが、私の学説なのです。

頑固な便秘、悪臭の強い便を長年そのままにしてきたから、あなたは現在病気で苦しむ羽目になったのです。琵琶湖(胃腸内)の汚染を長年放置してきたからあなたの淀川(身体)が病気で苦しんでいるのです。あなたの病気の種類は関係ないのです。あなたの琵琶湖をきれいにしない限り、あなたの淀川の改善はありません。1日も早くあなたの琵琶湖をきれいにしなさい、1日も早く「きれいな便」を排泄するように心がけなさい、とっているのです。

また、たとえ現在のあなたが健康であっても、「悪臭便」や「便秘」を放置している限り、いつ病気におかされるかわからないのです。最も大切なことは、あなたの淀川が病気になる前に、あなたが健康なうちに、できるだけ早く琵琶湖の浄化を心がける、「胃腸内異常発酵」を防止、改善することなのです。

そのために私が提唱しているのが水による健康法であります。

「胃腸内異常発酵」を防止あるいは改善するのが「電気分解によりえられる水(還元水)」ということになります。

還元水を調理用、飲用に使っておりますと、毎日の排泄便が驚くほど「きれいな便」になっていきます。1か月もすれば、あなたの排泄便はまるで「母乳栄養児の便」のよ

うな悪臭のほとんどない、軟らかい、淡黄色の便に変わっていくことがわかります。なお、厚生省が「胃腸内異常発酵の改善に有効である」との通達を出しているのは、あくまでも「電解分解によりえられる水」だけであることを明記しておきたいと思えます。

電解水が登場してからかれこれ30年以上が経過しております。還元水の飲用により難病から開放されたという例は多く、電解水の信奉者も数多いことと思われませんが、肝腎の理論に不備があったため、今まで正当な評価を受けることができなかったといえます。

私は8年前この水に着目し、還元水の最大の意義はその「胃腸内異常発酵」の改善作用にあることを強調してまいりましたが、未だに電解水はまゆつばだといった幼稚な意見が数多くみられます。最近になって、還元水の意義は活性酸素の働きを制御する場を与えるのではないかという、さらに大きい可能性があると考えられるようになってきました。

電解水はまゆつばどころか、生体にとって最も理想に近い水だと結論しうるのです。論理的に追求していくにつれ、その秘密が徐々に明らかになってきつつあるのです。

## 5つの仮説

私はこれまでに以下に述べる5つの仮説を提唱してまいりました。いずれも私独自の発想から生まれたものであると同時に、既存の医学の根源に触れる内容のものばかりであります。今後は、これら仮説の証明に全力を傾注していきたいと考えおります。読者の方々は、どうか既成概念、先入観念を離れ、ご自身の頭脳で判断していただきたいと存じます。

### 1. 人体構成細胞200兆個説

これまでの見解では、人体は100兆個(60兆個)の細胞により構成されているといわれてきました。しかしながら、私の考えでは、このような見解は正しいものとはいえません。100兆個という数字はあくまでも体細胞の数のみを意味しており、腸内微生物の存在が考慮に入れられておりません。私の見解では、人体は100兆個の体細胞と100兆個の腸内微生物をあわせた総計200兆個の細胞から構成されているというべきであります。ここで、細胞というものと微生物というものとの間には何ら本質的な差異はないということを認識しなければなりません。といいますのも、30数億年前の原始の水の中に誕生した単細胞生物こそが現在地球上に棲息するすべての植物ならびに動物にとっての単一共通祖先であるからであります。進化論から考えるなら、微生物とは人体を構成するすべての細胞の先行生命体に他ならないのであります。

肝臓、膵臓、あるいは腎臓などの体細胞器官の機能を検索する際、腸内微生物の機能と切り離して論じることは本質的な誤りであり、また不可能であります。なぜなら、腸内微生物の機能が肝臓、膵臓あるいは腎臓の機能に影響を及ぼしていることは明白なる事実であるからであります。人体とは一個の完成された統合生命体であり、そこでは人体を構成する総計200兆個の細胞と微生物が緊密なる相互協調、相互依頼、共生の関係のもと、健全なる生命の維持という両者共通の目的を全うすべく互いにその責務を分担遂行しているのであります。

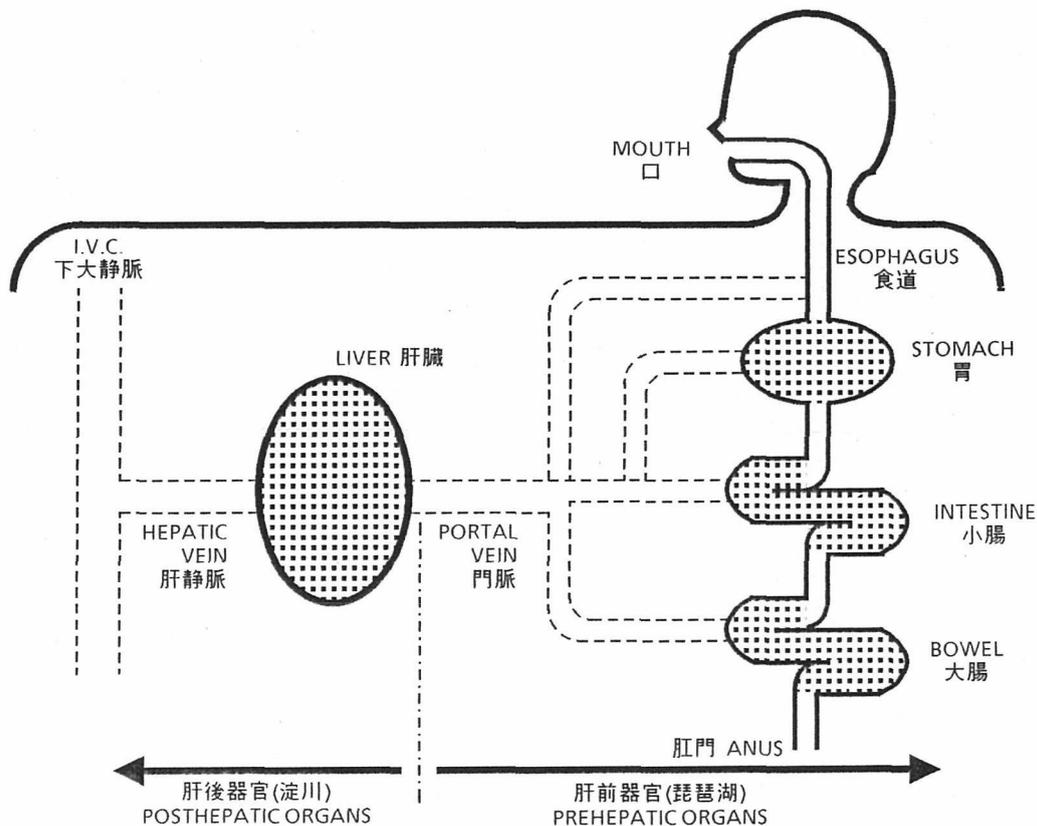
現代医学医療においては、体細胞器官の機能に対しては多大の関心と注意を払う一方で、腸内微生物の役割にはほとんど関心を払おうとはしません。

血清あるいは尿中の代謝産物の測定数値というものはすべて、体細胞器官による代謝機能の数値ならびに腸内微生物による代謝機能の数値の両者によってもたらされた代謝産物の合計値に他ならないのであります。人体のあらゆる代謝は総計200兆個の細胞の連携によって営まれ維持されているのですから、腸内微生物の代謝機能を考慮に入れずに体細胞器官の機能を検索し論じようとしている現代医学の方法論は再検討されるべきであります。このような方法論は根本から誤りであり、病人の診断と治療において誤りをおかすことは避け難いといえるのであります。

また、現代医学においては新薬の開発、テストならびに評価に際して動物実験を行なうことを常としております。しかし、この常法も再考されるべきであります。なぜなら、動物の種によって腸内微生物の性質は大きく異なっているからであります。マウスとヒトでは腸内微生物はまったく異なっており、投与された薬剤の代謝変化は異なる種の腸内微生物の性質と種類によってまったく違ったものになりうるのであります。このように考えるとき、マウスの治療に有効であると判定された薬剤がヒトの治療にも有効であるという保証はないことになるのであります。

人体は200兆個の細胞より構成されているとの概念の構築が急務であると考えます。

## 2. 肝前、肝後器官説



経口摂取された飲食物はまず消化管のなかで代謝されます。代謝された物質は消化管壁にある血管から吸収され、門脈を経て肝臓に運ばれていきます。門脈血の成分すなわち、消化液ならびに腸内微生物による代謝によって生じた代謝産物の組成は肝臓に重大な影響を及ぼすと同時に全身の代謝機能にも大きな影響を与えることを知るべきであります。

腸内微生物の異常発酵によって生じた硫化水素、アンモニア、ヒスタミン、インドール、フェノール、スカトールなどの腐敗性代謝産物は肝臓のみならず全身に甚大な影響を及ぼし、結果的に私たちの健康と長寿に致命的な影響をもたらすことになるので

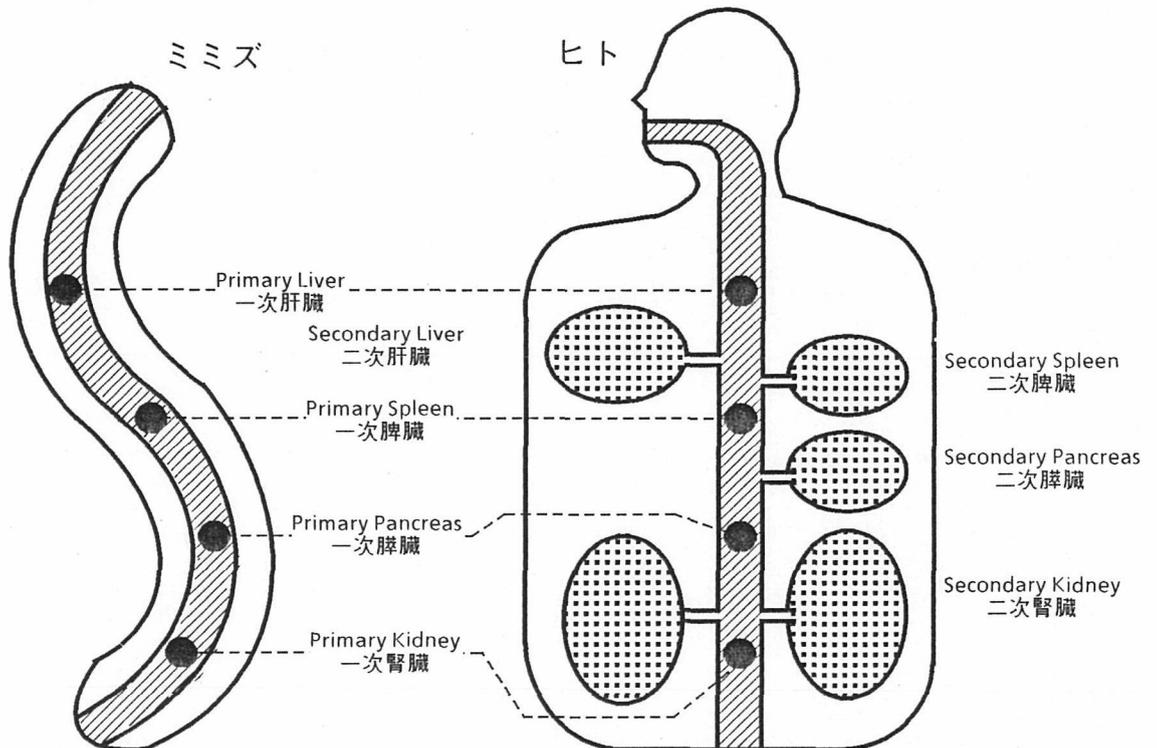
あります。

私の考えでは、口から食道、胃、小腸、大腸、門脈にいたるまでの器官を「肝前器官」と定義するとき、肝臓から肝静脈、下大静脈、中枢および末梢血管ならびに残りのすべての器官は「肝後器官」と定義することができると思われます。

肝前器官の機能と代謝が全身の器官の機能と代謝に決定的な役割を演じていることはいうまでもありません。

現代の混迷する医療問題の解決のためには、私の提唱する「肝前・肝後器官説」の概念の導入が不可欠であると確信するのでもあります。

### 3. 二重臓器説



ミミズとヒトを比較するとき、ミミズは肝臓、膵臓、腎臓などの独立した臓器を所有しないにもかかわらず生きています。私たちヒトは肝臓、膵臓あるいは腎臓を摘出されたら数分内に死んでしまいます。

私の考えでは、ミミズの消化管の中には肝臓、膵臓あるいは腎臓の働きをしている微生物が存在するに違いないと思われます。それらの微生物はそれぞれ一次肝臓もしくは原始肝臓、一次膵臓もしくは原始膵臓、一次腎臓もしくは原始腎臓とでも定義することができると思います。ラマルク・ダーウィンの進化論からいえば、これら一次もしくは原始臓器細胞がそれぞれに対応する二次もしくは独立臓器に進化したと推論することができるのです。私の考えでは、ヒトを含めた高等動物は肝臓、膵臓、腎臓などの独立臓器のみでなく、同時に原始肝臓、原始膵臓、原始腎臓をも所有していると考えられるのです。このような考え、すなわち「二重臓器説」を私は提唱したいと思います。この「二重臓器説」に従いますと、ヒトは原始肝臓、原始膵臓、原始腎臓のみでなく同時に原始卵巣、原始睾丸、原始甲状腺、原始副腎、原始脳下垂体なども所有しているとの推論も成り立つことになります。そして、原始膵臓はいまでも依然としてインシュリンを、原始卵巣は、エストロジェン、プロジェステロンを、原始睾丸はテストステロンを、原始副腎はステロイドホルモンを分泌している、と仮定することも一概に不合理であるともいえないでしょう。

腸内微生物の中には、酵素を生成するもの、ホルモンやビタミンを生成するものもいることがすでに知られています。酵素を産生している微生物は酵素産生能をもつ肝臓細胞の先行生命体であり、女性ホルモンを分泌している微生物は、女性ホルモン分泌能をもつ卵巣細胞の先行生命体であり、男性ホルモンを生成している微生物は男性ホルモン生成能をもつ睾丸細胞の先行生命体であり、甲状腺ホルモンを産生している微生物は甲状腺ホルモン産生能をもつ甲状腺の先行生命体であり、副腎ホルモンを分泌している微生物は副腎ホルモン分泌能をもつ副腎の先行生命体であり、脳下垂体ホルモンを生成している微生物は脳下垂体ホルモン生成能をもつ脳下垂体の先行生命体であるとの仮定も可能となります。

もし、「二重臓器説」が正しいものであるとするなら、独立臓器、器官の代謝機能にのみ注意を向け、腸内微生物群すなわち原始臓器器官群の役割を考慮に入れない現代医学の診断と治療が過誤をおかすのは当然であるといえるのであります。

#### 4. 疾病の原因ならびに誘因説

液体、固体、気体の三相を自由に变化する物質としての水は、現在までに認知されている何十億をこえる惑星群のなかで地球上においてのみ、その存在が確認されております。

そして、生物もまた地球上においてのみその存在が確認されております。

この事実から、地球上の水の存在が生物の誕生および生存を可能にした、さらには水の可否が生物の健全を規定するに相違ないと推論することができるのであります。百数十万種を数える地球上の全生物はDNA生物と総称されています。DNAの構造は水素、酸素、炭素、窒素の四元素から構成されておりますが、これらの四元素は地球上のみならず水星、金星、火星をはじめ太陽系を形成する他の惑星上にも存在することに違いありません。なぜなら、太陽系は数十億年前のビッグ・バンにより生まれたとされており、したがって太陽系の惑星は皆同一の元素を共有していると考えられるからであります。

それでは、なぜこれら四元素はひとり地球上においてのみDNAならびにDNA生物をつくりえたのでありましょうか。それは、とりもなおさず他の惑星上でなく、地球上にのみ「水」が存在していたからであります。地球上における「水」の存在がDNAならびにDNA生物の誕生、存在、継続を可能にしえたのであります。

したがって、「水」の性状がDNAおよびDNA生物の状態を規定するに違いないとの結論に達しうるのであります。

いま、「疾病」とは「DNAの非正常状態」とであると定義するとき、「疾病」とは「水の非正常状態」とであると定義しうるのでありましょう。なぜなら、「水という原因」が「DNAという結果」を生んだといえるからです。

細菌あるいはヴィールスがそれぞれに対応する疾患の原因であるというのが、現代医学の一般的な通念であります。

これに対し、あらゆる細菌あるいはヴィールスの誕生を可能にした「水」がすべての疾患の原因であるに違いない、というのが私の提言であります。

このように考えますと、疾病の唯一無二の「原因」は水であり、細菌やヴィールスは疾病の「誘因」と考えるべきであるとの結論に達するのであります。換言すれば、細菌やヴィールスが生物の細胞の中の「水の非正常状態」を引き起こしたときのみ、それらは疾病を引き起こすことができ、いっぽう細菌やヴィールスが生物の細胞の中の「水の非正常状態」を引き起こしえないとき、それらは疾病を引き起こしえないということになるのであります。

このとき、細菌やウイルスは疾病の誘因であるということになります。  
右のような考えを「疾病の原因ならびに誘因説」と名づけ提唱するものであります。

## 5. 水制御学説

地球上における水の存在が、DNAならびにDNA生物の誕生を可能にした。  
細菌であれウイルスであれ、それらはすべて水の所産であるから、水こそが疾病の唯一無二の「原因」であり、細菌やウイルスは疾病の「誘因」であるというのが私の提言であります。

ところで、原始の水の中に誕生した最原初の生命体は嫌気性生物であったと考えられております。すなわち、30数十億年前の地球上では炭酸ガス、アンモニア、硫化水素、メタンなどの気体に覆われており酸素は皆無であったとされているのであります。この間、原始の水の中に誕生し、やがて繁殖を続けていった藍藻類などの原初生物の光合成により生成された酸素が徐々に蓄積されるにいたり、今から数億年前に好気性生物の誕生をみるにいたったと考えられています。嫌気性生物はみずからつくりだした酸素によって生存の危機にさらされたのであり、彼らのうち酸素による毒(活性酸素)をよく消去する能力を獲得した種のみがその後の好気性世界を生き抜くことが許されたのであります。

さて、現在地球上に生息する生物は程度の差こそあれ、好気性代謝を行なっているのであります。換言すれば、生物を支える二大要因とは酸素と水であると結論しうるのであります。したがって、生物の生存を脅かす要因は、論理に忠実にしたがって考える限りにおいて、酸素あるいは酸素代謝の異常、水あるいは水代謝の異常そして酸素ならびに水代謝の同時異常のいずれかであるとの結論に達しうるのであります。

ここに、酸素あるいは酸素代謝の異常とは「活性酸素の発生」に他ならないのでありまして、水の異常とは活性酸素のもたらす水の異常に他ならないのであります。

すなわち、「活性酸素のもたらす生体内の水の非正常状態」こそが疾病の唯一無二の原因であるとの結論に達しうるのであります。

また、疾病とは「水の非正常状態」に他ならないからこそ、「水」のみがその「非正常状態」を「正常状態」に還元しうるのであります。

万生の根源は水であります。万生の根源である「水」が嫌気性生物さらには好気性生物の誕生をもたらしたのであります。好気性生物は酸素と水に依存しており、酸素代謝のもたらす活性酸素が水の非正常状態をもたらす。そして、その非正常状態を水が元に還元するのであります。当然といえば、あまりにも当然すぎる結論に達するのに、人類は20世紀の末まで待たねばならなかったのであります。

水が万生を制御する。水制御学説を提唱する所以であります。